

映画で学ぶ 情報を見極める力 / 第2回

『市民ケーン』授業ガイド

メディアを持つ者の力——「その情報を『誰が』出しているか。」

教員用・指導資料（対象：中学生以上）

📖 本資料はAI（Claude / Anthropic）で作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家の監修ではありません。授業での使用可否・場面の選択・学年の適否は、担当の先生が最終判断してください。

1 授業の概要

テーマ	メディアを持つ者の力（メディアの持ち主・見出し・世論の関係を考える）
教材映画	『市民ケーン』（原題 Citizen Kane／1941年・アメリカ／製作・監督・脚本・主演：オーソン・ウェルズ）
対象	中学生以上。暴力的な描写はほとんどないが、時間軸が行き来する構成のため事前説明が必要
時間	標準100分（50分×2）。上映119分。厳選クリップ・あらすじ紹介を組み合わせる
中心概念	メディアの所有者／見出しと世論／複数の証言で一人の人を描く構成／情報で人を理解する限界
ねらい	メディアを「誰が持ち、どう使うか」に目を向け、見出しや一部の情報だけで判断しない姿勢を身につける
準備物	生徒用ワークシート（別PDF）／新聞の見出しの例（実物または作例）／筆記用具

2 内容への配慮（必ずお読みください）

⚠️ 古い作品を扱う際の注意

1941年の白黒映画で、暴力的な描写はほとんどありません。ただし、**時間軸が行き来する構成**のため、予備知識なしでは理解しにくい場合があります。

- 事前に「**ケーンの人生を、何人もの証言でたどる映画**」であることを伝える。
- 証言者と語られる時期を板書して、**構成を見える化**する。
- 実在の新聞王がモデルとされるが、**映画は創作**であることを伝える。
- 現在の特定のメディアや企業を名指しで批判する授業にしない。

📄 レイティング・著作権について

- 年齢区分は配信版・ソフトにより表示が異なる場合があります。使用予定の版をご確認ください。
- 授業での上映には教育機関向けの権利処理が必要になる場合があります。本教材の文章はすべてオリジナルで、ポスター・場面写真は使用していません。

3 新聞王とメディアの力（予備知識）

見出しが世論をつくる

ケーンの新聞は、刺激的な見出しで読者を集め、世論を大きく動かしていきます。「市民のため」と言いながら、いつの間にか**自分の欲や名誉のために新聞を使っていく姿**が描かれます。

モデルになった新聞王

ケーンのモデルは、実在の新聞王**ウィリアム・ランドルフ・ハースト**だと言われています。ハースト側はこの映画を強く嫌い、自社の新聞で映画の宣伝を拒むなど、上映を妨げようとしていました。メディアの力が、映画そのものにも向けられたのです。

💡 「複数の証言」 でできた映画

この映画は、ケーンを知る何人もの人の証言（回想）を順番に見せる構成です。**人によって見える顔がちがい、全部を知る人はいない**。特集第1回『羅生門』と見比べると、「一人の人・一つの出来事を複数の視点から見る」という共通点が見えてきます。

メディアを見る4つの視点（板書用）

① 誰が持っている？

その新聞・番組・サイトは、誰が運営し、お金を出している？

② 見出しは中身と同じ？

目を引く見出しが、本文を正しく表しているか。

③ 何のために？

伝える目的は「市民のため」？ それとも自分の都合？

④ 一部で決めつけない

ある人の情報は、その人の一面にすぎないかもしれない。

🎯 この授業の到達目標

メディアの持ち主や見出しが世論に与える影響を説明でき、見出しや一部の情報だけで判断しないための方法を具体的に挙げられる。

4 100分授業の流れ（50分×2）

時間	ながれ	先生の動き・発問
0-10分	導入	同じ出来事を報じた2種類の見出し（作例）を見せ、印象の違いを話し合う。
10-20分	背景	映画の構成（記者が証言を集める）とモデルの新聞王を説明。
20-48分	映画を観る①	冒頭のニュース映画、「バラのつぼみ」の場面、新聞社を手に入れる場面（クリップ）。
50-72分	映画を観る②	選挙の場面、証言者ごとのケーン像の違い（クリップ）。
72-90分	ワーク記入	見出しづくりの体験や「メディアを見る4つの視点」で考える。
90-100分	共有・まとめ	板書「その情報を『誰が』出しているか。」で締める。

🌱 まとめ

メディアは、人々が何を知り、何を考えるかに大きな影響を与えます。そのメディアを誰が持ち、どう使っているのか——80年以上前の映画の問いは、SNSやネットメディアの時代にも変わりません。そして、どれだけ情報を集めても、一人の人のすべてはわからないことも忘れずに。

5 映画の背景知識

原題／邦題	Citizen Kane ／ 市民ケーン
製作年・国	1941年・アメリカ。上映119分。白黒。日本公開：1966年
製作・監督・脚本・主演	オーソン・ウェルズ（制作当時25歳）。撮影はグレッグ・トーランド（パンフォーカスなど新しい表現）
受賞・評価	アカデミー賞9部門にノミネートされ脚本賞を受賞。英国映画雑誌の「史上最高の映画」投票やAFIのベスト100で長年1位
モデル	新聞王ウィリアム・ランドルフ・ハーストがモデルとされる（映画は創作）

主なキャストと役柄

- ・ **オーソン・ウェルズ**（チャールズ・フォスター・ケーン役）：製作・監督・脚本も一人でこなした。
- ・ **記者トンプソン**：「バラのつぼみ」の意味を探り、ケーンの元妻や友人、元部下に話を聞いて回る案内役。

「バラのつぼみ」の正体

最後に明かされる「バラのつぼみ」の正体は、登場人物の誰も知らないまま終わり、観客だけが知ることになります。「どんなに情報を集めても、人の心の奥は見えない」ことを表しているとも言われます。

※上記の事実は公開情報（映画.com、Wikipedia等）をもとにしています。細部・脚色には諸説あるため、授業前に必要に応じてご確認ください。

6 発問例・見取りのポイント

Q. ケーンの新聞は、どうやって世の中を動かしていった？

→ 刺激的な見出し、自分に都合のよい報道など、映画の場面を根拠に挙げさせる。

Q. 証言者によって、ケーンの印象はどう違った？

→ 友人・妻・部下の立場と、語られるケーン像の違いを整理させる。『羅生門』との比較も有効。

Q. 今の時代、「メディアを持つ者」とは誰だろう？

→ 大手メディアだけでなく、SNSの運営会社や発信力のある個人にも視点を広げる。

ワークシートの見取り（評価の観点）

- ・ メディアの持ち主や見出しが世論に与える影響を、具体的に説明できているか。
- ・ 証言者の立場によって人物像が変わることを読み取れているか。
- ・ 現代のメディアやSNSにも視点を広げて考えられているか。
- ・ 意見の発表は強制せず、書いた内容を尊重する。

7 シリーズ全体像

回	映画	テーマ	目安
1	羅生門	証言はなぜ食い違うのか	中学生～
2	市民ケーン	メディアを持つ者の力	中学生～
3	父親たちの星条旗	一枚の写真がつくる「物語」	中学生～
4	スポットライト 世紀のスcoop	一次情報と裏づけ	高校生～
5	アルゴ	実話映画の脚色	中学生～
6	JFK	事実と主張を見分ける	高校生～
7	ソーシャル・ネットワーク	プライバシーと同意	高校生～
8	監視資本主義：デジタル社会がもたらす光と影	SNSのしくみを知る	中学生～

8 参考資料（主な出典）

市民ケーン 作品情報（映画.com） <https://eiga.com/>

Wikipedia「市民ケーン」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/市民ケーン>

作品：映画『市民ケーン』（1941年、監督オーソン・ウェルズ）

© 2026 FilmEdu AI / 本資料はAIを活用して作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家による監修ではありません。授業での使用可否・場面選択・学年の適否は担当教員の判断によります。作品の著作権は各権利者に帰属します。授業での上映には適切な権利処理（教育機関向けライセンス等）が必要になる場合があります。内容の誤りにお気づきの際はお問い合わせよりご連絡ください。